



ハートフォード生命保険株式会社

〒105-0001
東京都港区虎ノ門4-3-20 神谷町MTビル3階
<http://www.hartfordlife.co.jp>



ハートフォード生命
セカンドライフ満足度指数 2006
Hartford "Peace of Mind Index" 2006



イントロダクション

調査の目的

Index

イントロダクション

調査の目的	01
-------	----

1. セカンドライフ満足度指数

① 2006年度のセカンドライフ満足度指数は44.7ポイント	02
--------------------------------	----

- ・2006年度のセカンドライフ満足度指数は44.7ポイント
- ・現セカンドライフ層の満足度は約10ポイント低下。
一方プレ・セカンドライフ層のセカンドライフ意向度は高まる。

② セカンドライフとは	03
-------------	----

- ・セカンドライフは、「定年して退職した後の生活」と考える人が3割
- ・項目別満足度では「体力的に」が高まったものの、「自己実現」が低下
- ・満足度の高い人みるセカンドライフ像
- ・現セカンドライフ層全体と満足層の項目別満足度比較
- ・セカンドライフに満足している人は現在の生活に対する充足度も高い
- ・セカンドライフの生きがい
- ・現セカンドライフ層は家族関係に高い自信。満足層の自信は94.1ポイントにおよぶ
- ・現セカンドライフ層の就業意向
- ・今後もなんらかのかたちで仕事を続けたい有職者は76.8ポイント
- ・満足層は仕事を通じて自分の行き方に納得し内面の成長をはかる
- ・セカンドライフの満足度が高い人のモデル像 まとめ

③ プレ・セカンドライフ層	08
---------------	----

- ・仕事に関連づけてセカンドライフを定義する傾向
- ・プレ・セカンドライフ層のセカンドライフ意向度は2005年度調査比で7ポイント増加
- ・セカンドライフ定義では、自分の意思で仕事を続けられるかどうかを重視
- ・意向層は仕事をしつつもゆとりのある生活をしたい
- ・経済的に恵まれた家庭と自らの成長がはかれるメリハリのある生活が生きがい
- ・「人間関係」や「出会い」に高い充足度
- ・セカンドライフ意向層のモデル像 まとめ

検証 生涯現役の実態とは	11
--------------	----

- ・約半数が仕事をしたい
- ・お金や名誉よりも自分が納得のいく仕事を
- ・セカンドライフ前後の時間の増減
- ・時間配分は仕事から、趣味や習い事、家族との時間へ

まとめ 満足度が高く実りあるセカンドライフを送るために	13
-----------------------------	----

2. 団塊世代とセカンドライフ	14
-----------------	----

- ・団塊世代にとってのセカンドライフとは「もう一度始まる新しい人生」
- ・男性にとって生涯現役とは「仕事を続けること」、女性にとっては「自立した生活」
- ・団塊世代の男性は、同じ仕事を続けたい
- ・セカンドライフへの興味と準備
- ・セカンドライフへ向けての準備の度合い

定義、調査フレーム1・2	17
--------------	----

日本型のセカンドライフモデルを提案していくために開始された「ハートフォード生命 セカンドライフ満足度指数」調査も今回で3年目を迎えました。平成18年10月末に総務省が発表した平成17年国勢調査の確定値によると、65歳以上の高齢者人口は2567万人となり、総人口に占める割合は前回調査よりも2.8ポイント上昇し、過去最高の20.1%となりました。75歳以上では1160万人で、こちらも総人口に占める割合が過去最高の9.1%に達しました。このような状況をふまえ、これからセカンドライフにおいてどのように人生の質を高め、社会的役割を拡大する事が出来るかは私達の重要な課題であります。

高齢化が進むにつれて「セカンドライフ」という言葉をますます耳にするようになってきました。長寿国の日本に世界の視線が注がれる中、ハートフォード生命保険では日本人のセカンドライフに関する意識に焦点を当て、2004年度から経年で調査を行っております。

まず、2004年度に実施した第1回目の調査では、日米英の3カ国においてセカンドライフの満足度に関する質問を行い、私達日本人がセカンドライフに抱いている独自の意識を客観的に浮き彫りにしました。この調査の結果、生涯にわたって仕事を通じ、社会とのかかわりを持ち続けるとともに、経済的不安を解消したいと思っている日本人ならではのセカンドライフ観が明らかになりました。続く2005年度の調査では、この日本人ならではのセカンドライフ観を前提に、日本人のセカンドライフ満足度を形成している価値観とは何かというテーマについて、50歳～69歳の男女を対象に更に深く分析を行いました。その結果、それぞれの望むかたちの働き方を通して豊かな生

活を楽しみ、社会とつながっているためにも出来るだけ長く現役でいたいと言う、多様化した生涯現役モデルの方向性が浮かび上がりました。

仕事とセカンドライフ。2004年度、2005年度の調査結果によって明らかになってきたこの重要なキーワードを象徴させるような出来事が起ころうとしています。2007年から、いわゆる「団塊の世代」が60歳に到達し始めます(2007年問題)。高齢者の就業機会を改善していく政府案も実行に移され(高齢者雇用安定法改正)、これからますます生涯現役モデルは多様化・活発化していくでしょう。「仕事とセカンドライフ」今回の調査ではこの潮流をふまえながら、日本人の生涯現役志向を成立させている価値観がどこに由来しているかをさらに深く読み取り、満足度の高いセカンドライフを送っている人はどのような意識を持っているのかを探ることにより、居心地のよい幸せなセカンドライフを実現するためのヒントを浮かび上げさせました。

今後もハートフォード生命保険株式会社は、セカンドライフに関する調査研究を広く公開し、多方面にわたる協力関係を構築しながら、より多くの方のセカンドライフが幸せで実り豊かな人生のステージとなりますよう、さまざまな提言を行っていきたいと考えています。

セカンドライフ満足度指数

①2006年度のセカンドライフ満足度指数は44.7ポイント

2005年度比マイナス1.4ポイント

2006年度のセカンドライフ満足度指数は44.7ポイント

まず、この調査では、現在自分は既にセカンドライフを送っていると回答した人を「現セカンドライフ層」*1。自分は今からセカンドライフに入ると回答した人を「プレ・セカンドライフ層」*2と定義する。

現セカンドライフ層にたずねた生活満足度と、プレ・セカンドライフ層にセカンドライフに早く入りたいかどうかの割合（以降「セカンドライフ意向度」）をたずねた結果をもとに「セカンドライフ満足度指数*3」を算出したところ、2006年度は44.7ポイントとなった。（表1）これは2005年度調査の46.1ポイントと比較して1.4ポイントのダウンとなる。

現セカンドライフ層の満足度は約10ポイント低下。一方プレ・セカンドライフ層のセカンドライフ意向度は高まる。

セカンドライフ満足度を現セカンドライフ層とプレ・セカンドライフ層に分けて分析すると、現セカンドライフ層の満足度（「満足」+「まあ満足」の合計）は70.7ポイントとなり、昨年度より10ポイント近く下落している。（表2）これにはさまざまな要因が想定できるが「時間的」「精神的」な満足度が下がり、自己実現ができていないと考えている人が増加しているのではないかと推察される。（表5）この点については次項で述べる。

一方プレ・セカンドライフ層のうち、セカンドライフに入りたいと答えた人の合計は18.6ポイントであり、前回調査11.6ポイントから7ポイント上昇した。（表3）これはさまざまなメディアを通じてセカンドライフを豊かに過ごすための情報が増えてきていることと、高齢者雇用安定法の改正により、60歳以降の就業機会が改善されて行く事などから、前向きなセカンドライフ像をイメージしやすくなってきたことも影響しているのではないだろうか。

表1 満足度指数

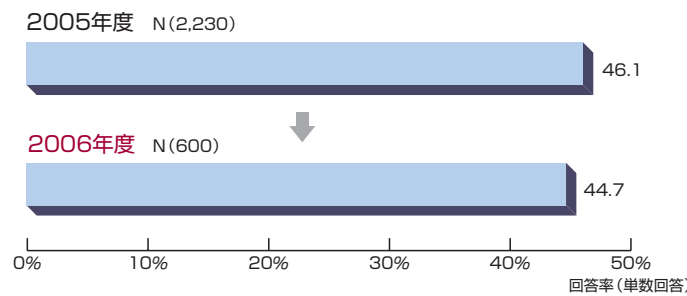


表2 現セカンドライフ層 満足度

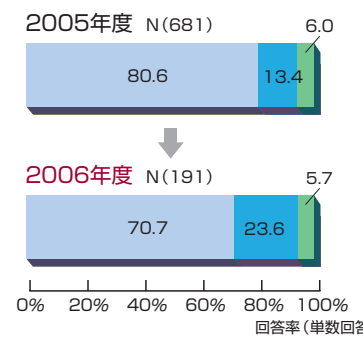
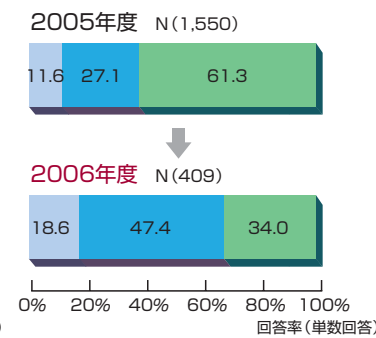


表3 プレ・セカンドライフ層 意向度



*1 現セカンドライフ層 = 「自分はすでにセカンドライフに入っている。」と回答した層。
 *2 プレ・セカンドライフ層 = 「自分はこれからセカンドライフに入る。」と回答した層。
 *3 セカンドライフ満足度指数

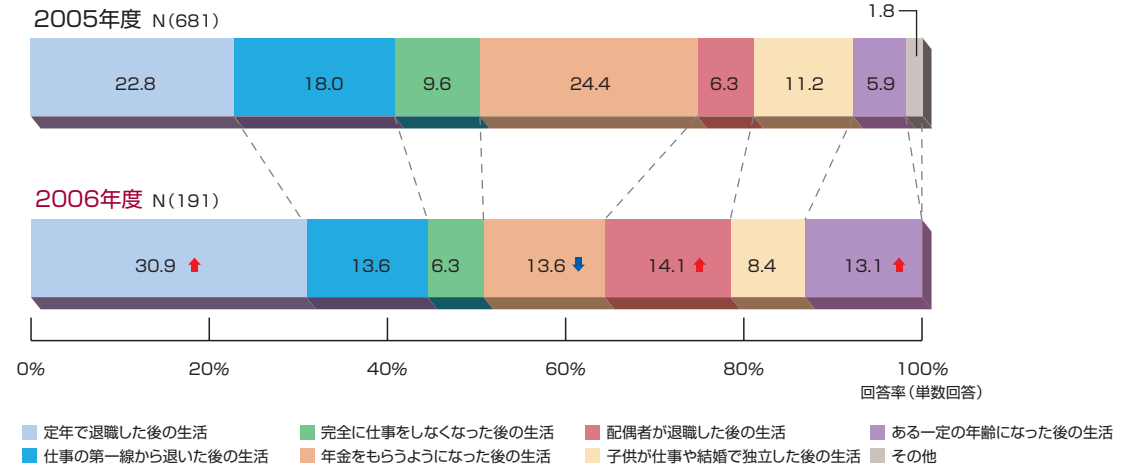
$$= \frac{\left(\text{現セカンドライフ層の「満足+まあ満足」計} \right) + \left(\text{プレ・セカンドライフ層の「今すぐ入りたい+できるだけ早く入りたい」} \right)}{2}$$

②セカンドライフとは

セカンドライフは、「定年して退職した後の生活」と考える人が3割

セカンドライフの定義はそれぞれの人の自己認識によって異なる。現セカンドライフ層に「あなたにとっての『セカンドライフ』とはどのようなことを意味するのか」をたずねたところ、2005年度調査と比較して「定年で退職した後の生活」「配偶者が退職した後の生活」「ある一定の年齢になった後の生活」という項目が大きく上昇した。一方で「年金をもらうようになった後の生活」は大きく低下するという特徴がみられた。（表4）この結果を2005年度の認識と比較すると、現セカンドライフ層にとっては、2005年度調査の結果に見られたような「仕事から離れた悠々自適な年金生活」言い換えれば、「定年後に社会制度上の公的年金をもらうようになった後の生活」という、社会制度を契機としてセカンドライフが始まるという認識が低下した。

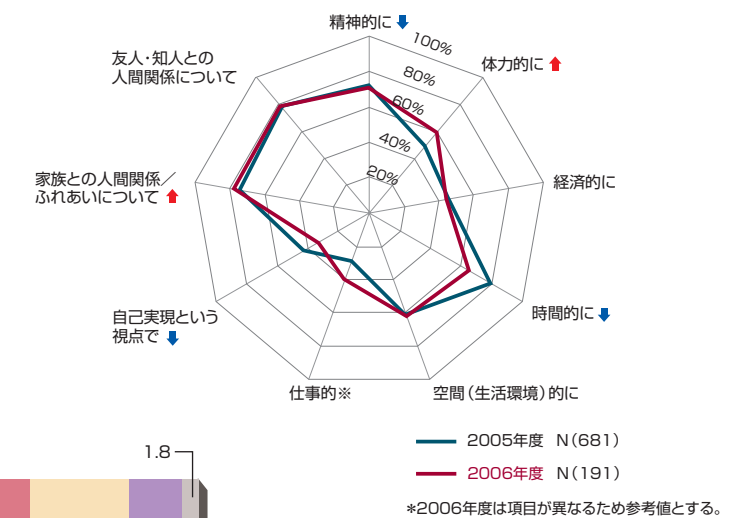
表4 現セカンドライフ層 セカンドライフ定義



項目別満足度では「体力的に」が高まったものの、「自己実現」が低下

現セカンドライフ層に対してさまざまな側面ごとの満足度を分析した結果が下図のレーダーチャートである。2005年度調査の結果と比較すると「時間的に」「自己実現という視点で」「精神的に」の各項目が低下し「体力的に」「家族との人間関係／ふれあいについて」が上昇している。（表5）セカンドライフに入る前に期待していたほどには、時間や精神的な満足度が高められず、自己実現が思うようにできていないという人が増加しているようであり、これらが2005年度調査よりも現セカンドライフ層の満足度が下がった原因の一つと推察される。

表5 現セカンドライフ層 項目別満足度 経年比較



満足度の高い人に見るセカンドライフ像

現セカンドライフ層で、現在の生活に満足している人は全体で約65%、満足していない人は約12%と満足度は全般的に高い。(表6)

現セカンドライフ層全体と満足層の項目別満足度比較

現セカンドライフ層全体と満足層の満足度を項目別に比較したところ、満足度の高い層は、現セカンドライフ層全体に比べて全体に満遍なく満足していることが伺える。満足層では、特に「家族との人間関係/ふれあいについて」「精神的に」「友人・知人との人間関係について」の満足度が高く、それぞれ80%を超える。(表7) 特に昨年度との比較では、今年度は満足度の低下していた「精神的に」の項目満足度が高い点は注目すべきだろう。

セカンドライフに満足している人は現在の生活に対する充足度も高い

現セカンドライフ層全体と、満足層に現在の生活に対する充足度についてたずねたところ、満足層では現セカンドライフ層全体に比べて全体的に高い充足度を得ていることがわかった。特に「能力向上」「生き方に納得」「趣味・余暇」「時間・精神的ゆとり」「家族・地域での人間関係」「充実感」で10ポイント以上の差がみられた。「趣味・余暇」「時間・精神的ゆとり」などに代表される、いわゆる悠々自適なライフスタイルを象徴する項目が高い数値を示す一方で、アクティブなセカンドライフを象徴する「能力向上」といった項目が支持されていることも注目に値する。(表8) この結果から、能力向上を通じて自分の生き方に納得し、生涯を通じて成長し続けたいという「自己実現」への欲求を満たす事が、より満足度の高いセカンドライフを送る為の鍵となる事が推察される。

表6 現セカンドライフ層 現在の生活の満足度

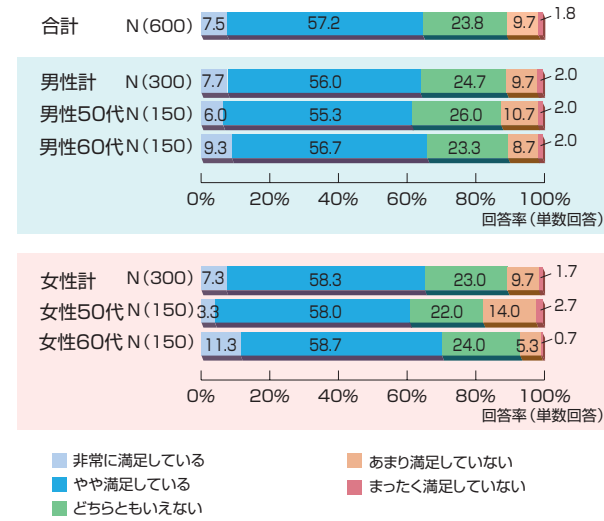


表7 現セカンドライフ層全体 対 満足層 項目別満足度

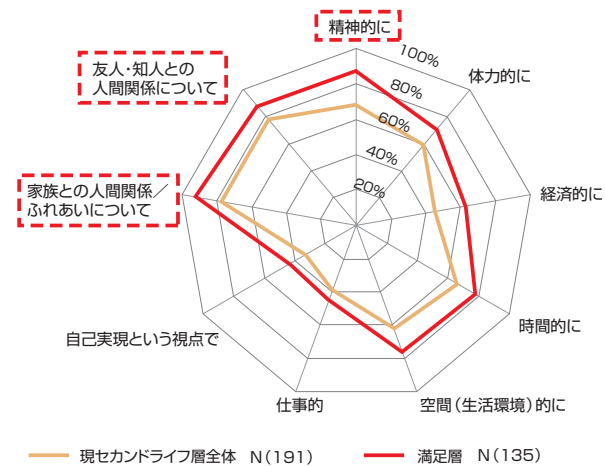
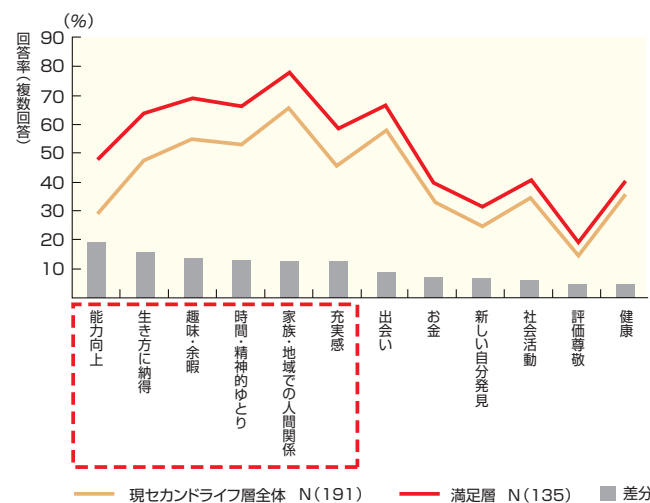


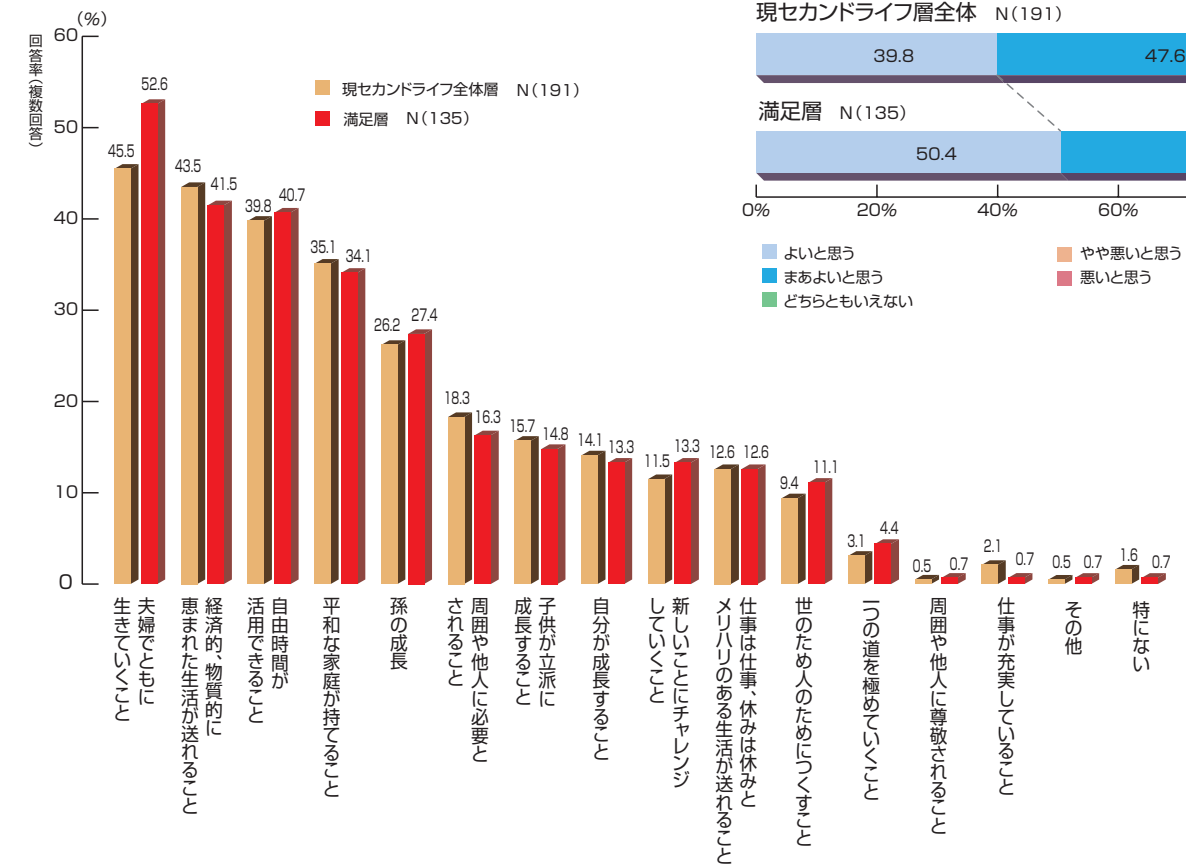
表8 現セカンドライフ層全体 対 満足層 現在の生活



セカンドライフの生きがい

現セカンドライフ層全体と、満足層に生きがいをたずねてみると、双方ともに「夫婦とともに生きていくこと」が最も高く、次に「経済的、物質的に恵まれた生活が送れること」が続いている。特に「夫婦とともに生きていくこと」については、満足層の数値は現セカンドライフ層全体と比べても7ポイント程高く、良好な夫婦関係がセカンドライフの満足度と相関が強いことが伺える。(表9)

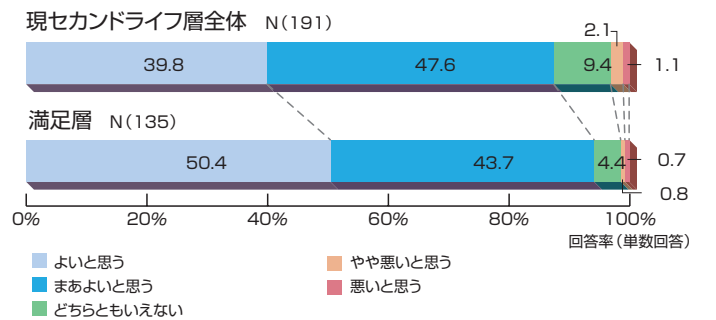
表9 現セカンドライフ層全体 対 満足層 生きがい



現セカンドライフ層は家族関係に高い自信。満足層の自信は94.1ポイントにおよぶ

現セカンドライフ層全体と、満足層に家族関係に対する自信をたずねてみると、現セカンドライフ層全体、満足層ともにきわめて高い水準を示した。現セカンドライフ層全体では「よいと思う」と「まあよいと思う」の合計が87.4ポイント。満足層においては実に94.1ポイントに達する。このことから、よい家族関係の構築がセカンドライフ満足度の基盤になっていることが推察される。(表10)

表10 現セカンドライフ層全体 対 満足層 家族関係に対する自信



現セカンドライフ層の就業意向

今後もなんらかのかたちで仕事を続けたい有職者は76.8ポイント

現セカンドライフ層のうち、働いている人の就業意向をみると76.8ポイントの人が今後もなんらかのかたちで仕事を続けたいと希望している。2004年度調査、2005年度調査からも判明したように、生涯にわたって仕事を通じ、社会と関わりを持ち続けたいといった日本人ならではのセカンドライフ像がここでも明らかになっている。(表11)

またいつまで働き続けたいかの質問に、22.6%の人が年齢に関わらず健康が続く限り働きたいと考えており、セカンドライフに入った後も高い就労意識を持ち続けていることが判明した。(表12)

満足層は仕事を通じて自分の行き方に納得し内面の成長をはかる

現在仕事をしている現セカンドライフ層全体と、満足層の双方に現在の仕事で充足している点をたずねたところ、満足層は「起業」以外の全ての項目で現セカンドライフ層よりも充足度が高かった。特に「やりがい」「自己成長」「能力発揮」「出会い」において10ポイント以上の差がみられる。「やりがい」「自己成長」「能力発揮」などが高い数値を示していることから、「出会い」や「人脈」といった社会とのつながりもさることながら、仕事を通じて成長し続けていく前向きな意識を読み取ることができる。また「高い地位」や「収入」が低いことにも注目したい。このことから、仕事を通じての成長が意味することが、地位などの対外的なことではなく、自分で納得の行く生き方と内面の成長であることが理解できた。(表13)

表11 現セカンドライフ層有職者の就業意向

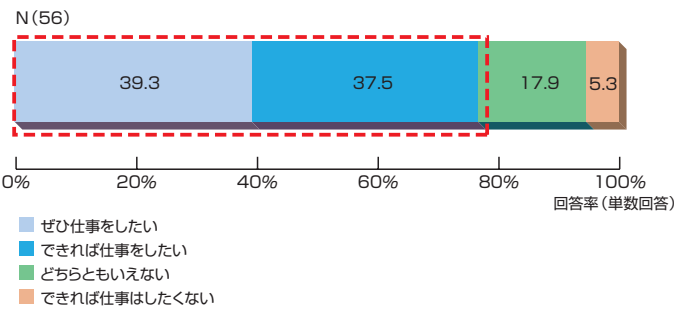


表12 現セカンドライフ層有職者 仕事を続ける年齢

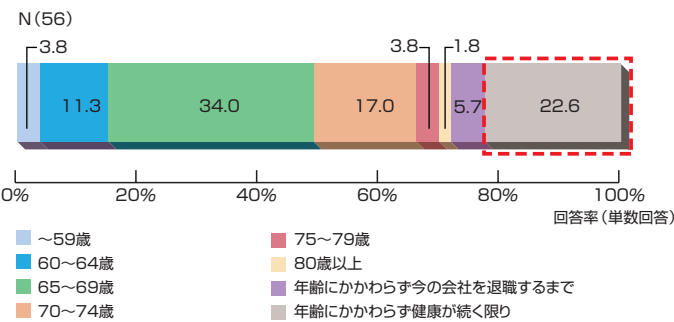
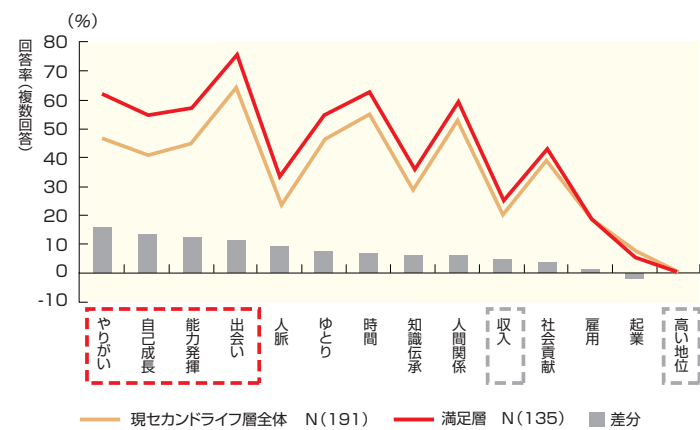


表13 現セカンドライフ層全体 対 満足層 現在の仕事 充足ポイント



セカンドライフの満足度が高い人のモデル像 まとめ

「自分の可能性を追い求める悠々自適な生涯現役」志向

- 現セカンドライフ層のうち、満足層(生活満足度に対する設問の答えが「満足」、「まあ満足」である人の合計)は、定年を迎えてセカンドライフに入り、時間的、精神的にもゆとりを持ち、趣味や余暇でも充実した生活を送っている。
- 夫婦とともに生きていくことを生きがいにしており、家族関係にも高い自信を持っている。
- 定年を迎えてもなお就労意向は高く、セカンドライフに入った後の仕事において重視しているのは、高い地位や収入などの外面的なことではなく、人々との出会いに代表されるような社会とのつながりや、自らの能力を発揮しながら内面的に成長していくことを重視しており、それらが実現することによって充実したセカンドライフを満喫している。

以上のようにゆとりや趣味・余暇、家族関係を基盤としつつ、仕事や生活を通じての能力向上、やりがい、充実感などが満足度の源となっていることをふまえると、今以上に内面的に成長できるかもしれないといった、「自分の可能性を追い求める生涯現役」志向が高まっていることが推察される。

③ プレ・セカンドライフ層

早くセカンドライフに入りたい人たち(セカンドライフ意向層)からみた
日本型セカンドライフの行方

仕事に関連づけてセカンドライフを定義する傾向

自分はこれからセカンドライフに入ると回答したプレ・セカンドライフ層に「あなたにとっての『セカンドライフ』とはどのようなことを意味するでしょうか」とたずねたところ、2006年度調査では「定年で退職した後の生活」「仕事の第一線から退いた後の生活」「完全に仕事をしなくなった後の生活」と続き、この3つの選択肢で58.9%を占めた。本人の仕事の状況と関連させてセカンドライフをとらえる人が多いようである。

2005年度調査結果では、回答の上位に「完全に仕事をしなくなった後の生活」と「定年で退職した後の生活」が定義として上げられたが、今年度は「仕事の第一線から退いた後の生活」「子供が仕事や結婚で独立した後の生活」と答える割合が上昇している一方、「完全に仕事をしなくなった後の生活」「年金をもらうようになった後の生活」が大きく低下している。(表14) この結果を見ると、これからはある一定の年齢を機に完全に仕事が無くなり、年金だけで生活して行くというセカンドライフ像が変化し、仕事の第一線から退いても尚、自分の意志次第で働き続けられると言うところから、主体性を持ってセカンドライフを定義する傾向の変化が見られる。又、「子供の独立」が定義に占める割合が高まっているのも今年度の注目点。

プレ・セカンドライフ層のセカンドライフ意向度は、2005年度調査比で7ポイント増加

2006年度のプレ・セカンドライフ層のセカンドライフ意向度は、昨年度の11.6ポイントから7ポイント上昇した。(表3再掲) ここから、プレ・セカンドライフ層のセカンドライフへ入ることへの抵抗感が弱まっており、「セカンドライフに入る時点

は自分で決定する」と主体的に捉えることで積極的にセカンドライフを生きようというセカンドライフへの態度の変化を読み取ることができる。

表14 プレ・セカンドライフ層 セカンドライフ定義 経年比較

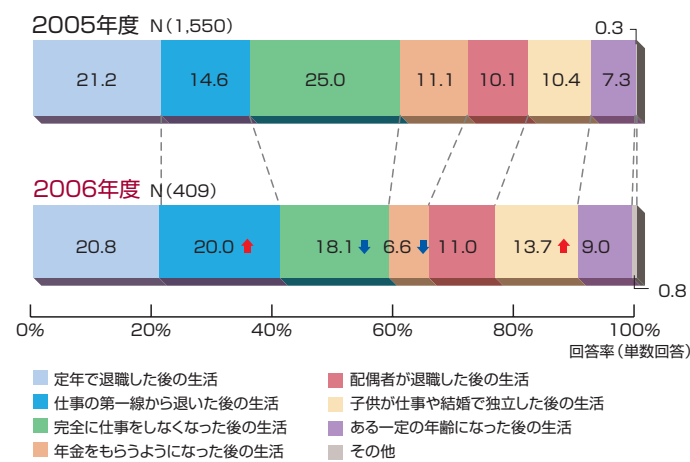
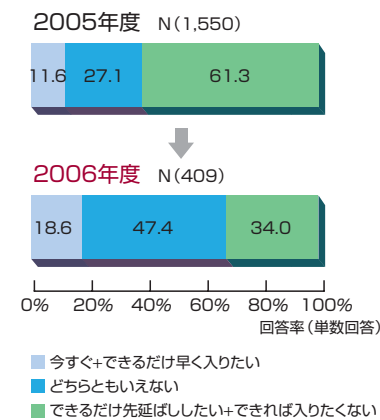


表3 (再掲) プレ・セカンドライフ層 意向度



セカンドライフ定義では、自分の意思で仕事を続けられるかどうかを重視

セカンドライフ意向層のセカンドライフ定義が2005年度調査と比較してどのように変化したかをみると、「定年で退職した後の生活」と答えた人が大きく低下し、「仕事の第一線から退いた後の生活」と答えた人が大幅に増加した。ここでもある特定の制度がセカンドライフの始まりではなく、自分の意思で仕事を続けられるかどうかを重視している人が増加していると推察される。(表15)

意向層は仕事をしつつもゆとりのある生活をしたい

一方、セカンドライフ意向層にセカンドライフに入った後で希望するワークスタイルをたずねた結果を比較すると、2005年度調査に比べ「日常生活を犠牲にしないレベル」と答える割合が上昇しており、「まだまだ第一線で活躍できるレベル」は低下している。このことから仕事をしつつもゆとりのある生活をしたいという人が増加しているといえるだろう。(表16)

経済的に恵まれた家庭と自らの成長がはかれるメリハリのある生活が生きがい

セカンドライフ意向層にセカンドライフにおける生きがいをたずねたところ、2006年度調査では「経済的、物質的に恵まれた生活が送れること」「平和な家庭が持てること」「夫婦とともに生きていくこと」などの項目が高い水準であった。2005年度調査の結果と比較すると引き続き高い水準の「経済的、物質的に恵まれた生活が送れること」「平和な家庭が持てること」に加え、「仕事は仕事、休みは休みとメリハリのある生活が送れること」「自分が成長すること」などの項目が上昇している。(表17)

表15 早くセカンドライフに入りたい層 セカンドライフ定義 経年比較

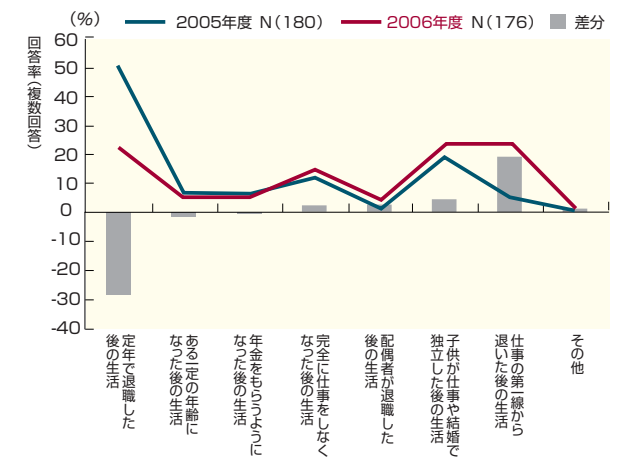


表16 早くセカンドライフに入りたい層 ワークスタイル 経年比較

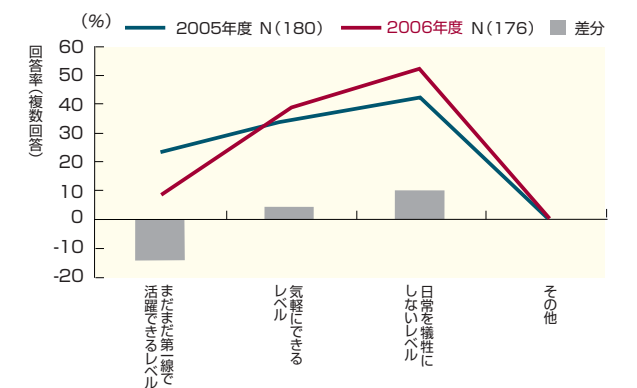
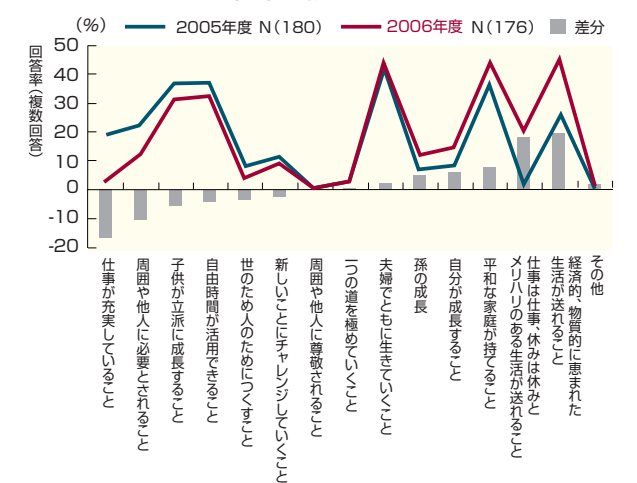


表17 早くセカンドライフに入りたい層 生きがい 経年比較

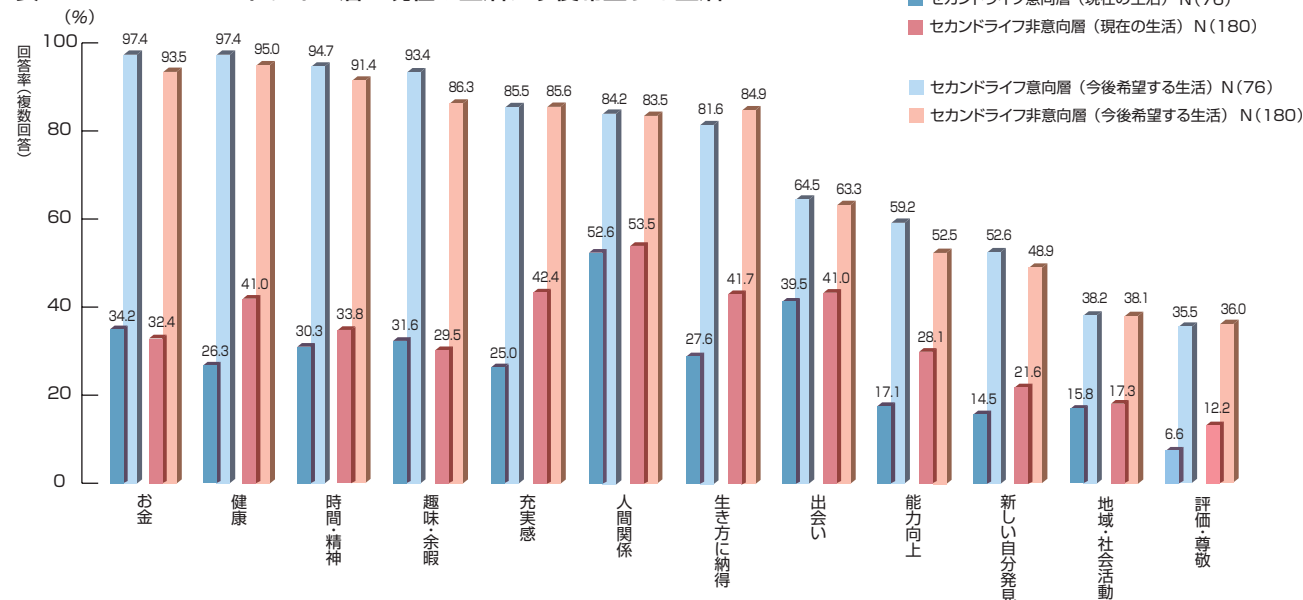


検証 生涯現役の実態とは

「人間関係」や「出会い」に高い充足度

セカンドライフ意向層とセカンドライフ非意向層の現在の生活に対する充足度を比較すると、「人間関係」や「出会い」について両者とも高い水準を示している。両者の比較から、意向層の特徴をみると、「お金」と「趣味・余暇」に関しては充足しているものの「健康」「時間・精神」「評価・尊敬」「生き方に納得」「新しい自分発見」「能力向上」「充実感」などの項目では非意向層の方が充足感を得られているようである。一方、今後の生活に希望する項目、満足度を高めていきたい項目は、意向層、非意向層ともに「お金」「健康」「時間・精神」「趣味・余暇」「充実感」などである。(表18)

表18 プレ・セカンドライフ層 現在の生活、今後希望する生活



セカンドライフ意向層のモデル像 まとめ 「悠々自適な生涯現役」志向

- 定年や年金といった外的要因ではなく、仕事の第一線は退いたものの、自分の意思で続ける仕事の始まりや、子供の独立などによるライフステージの変化をセカンドライフの始まりととらえている。
- 人とのつながりを大切に、経済的な心配をしないですむ生活は変えたくない。
- 経済的に恵まれた平和な家庭、夫婦とともに仲良く生きていく生活を築いていきたいと思っており、それを実現するために日常生活を犠牲にしない程度の仕事はバランスをとりながら続けていきたい。
- 今までの生活で満たされていなかった充実感や能力向上、新しい自分の発見といった自分自身を大切にしたい生活を送ってきたい。

こうした思いから、今後はゆとりのある仕事を選び、平和な家族を支えるための収入と自分の成長の両立が図れるようなメリハリのある生活を送ってきたいという、いわば「悠々自適な生涯現役」といったライフスタイルを将来のセカンドライフに志向している姿が見えてくる。

約半数が仕事をしたい

50歳から69歳までの男女にセカンドライフ以降の就業意向をたずねたところ、仕事をしたいと答えた人(「ぜひ仕事をしたい」+「できれば仕事をしたい」)の合計は5割に達した。個別にみると50代の男性では68.7ポイントの人が仕事をしたいと答えている。女性でも50代の人就業意向は高い。(表19)

また、セカンドライフ以降、配偶者が仕事を持ったほうがよいかという質問に対しては全体の68.2ポイントの人が持たせたいと答えている。(表20) 配偶者が仕事を持ったほうがよい理由としては経済的な理由が59ポイントと最も高いものの、「配偶者に生きがいややりがいを持たせるため」「配偶者が社会の人たちとつながってられるようになるため」という回答が続く。(表21) 仕事を通じた生涯現役モデルを理想とする日本独自のセカンドライフ観が現れた結果となった。

表19 就業意向

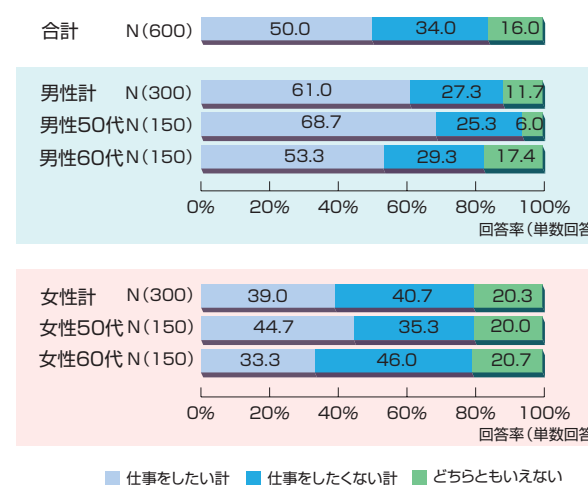
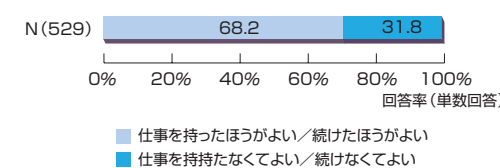


表20 配偶者就業意向



お金や名誉よりも自分が納得のいく仕事を

次に現在の仕事のワークスタイルと今後希望するワークスタイルについてたずねてみた。今後希望するワークスタイルでは「精神的にゆとりをもって取り組めるような仕事」「職場の人間関係の良い仕事」への希望が8割を超えている。一方で「少々きつくとも給料や収入の良い仕事」や「高い地位につけるような仕事」は6割に近い人がのぞまないと答えている。(表22)

表21 セカンドライフ以降配偶者に働いて欲しい理由

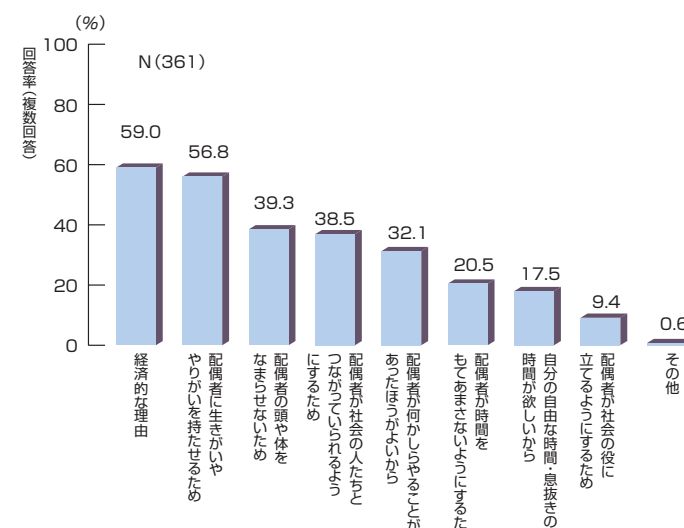


表22 ワークスタイル

	現在の仕事のワークスタイル N(399)		今後希望するワークスタイル N(600)	
	あてはまる計	あてはまらない計	望む計	望まない計
少々きつくとも給料や収入の良い仕事	22.3%	51.9%	18.0%	59.4%
雇用や保障が安定し充実している仕事	39.6%	40.4%	64.7%	19.1%
精神的にゆとりをもって取り組めるような仕事	42.9%	25.3%	86.5%	4.8%
時間的自由度の高い仕事	42.9%	33.9%	77.1%	7.1%
職場の人間関係の良い仕事	50.6%	15.8%	82.3%	5.0%
色々な人との出会いのある仕事	54.1%	18.1%	56.2%	11.0%
人脈をうまくいかせるような仕事	23.3%	40.6%	33.3%	24.0%
高い地位につけるような仕事	8.3%	64.9%	8.2%	59.7%
自分で事業を起こしたり始められるような仕事	17.3%	64.7%	16.7%	59.5%
自分の能力や個性を発揮できる仕事	48.1%	28.3%	58.1%	17.0%
生きがいややりがいを感ずることができる仕事	44.1%	23.1%	72.0%	7.0%
自分を成長させるような仕事	33.9%	26.8%	58.8%	12.0%
社会に貢献できる仕事	35.4%	29.5%	52.9%	12.6%
若い世代に知識や経験を伝えられる仕事	34.1%	33.3%	45.1%	15.0%

まとめ

満足度が高く実りあるセカンドライフを送るために

- ① 満足度の高い人は仲の良い夫婦関係、家族関係を基盤に自己実現の可能性を求め
- ② 仕事を通して能力を発揮し、自分を再発見し、さらなる成長を通して人生の充実をはかる
- ③ あらためて自分の可能性を求めていく準備を早めにしておく事が、セカンドライフに入ってから満足度を高める鍵

今回の調査によって、セカンドライフ満足層の満足の源を深く探ってみると、家族関係を基盤としつつも、それに加え能力発揮や成長といった自己実現の可能性を求めていくことが、セカンドライフにおいて高い満足を得るための重要な鍵となっていることが見えてきた。

こうしたことから、セカンドライフ満足層が志す生涯現役における仕事とは、経済的な役割もさることながら、自分を再発見する機会を求めていくための重要な手段として位置づけられるのであろう。よってこれからセカンドライフに入ろうとする人は、ゆとりや平和な家庭といった基盤を大切にはぐくんでいく姿勢はもちろんのこと、新しいステージにおいて、あらためて自分の可能性を求めていく準備を早めにしておくことが、幸せで実りあるセカンドライフのために重要になってくるだろう。

またセカンドライフに入ろうとする人、セカンドライフを送っている人を応援する国や自治体、企業などにおいても、定年廃止や継続雇用制度に代表されるような、長く働けるようにするための施策だけではなく、セカンドライフを送る人が自分の可能性を高め、内面から充足感を得ていくための質的な側面の検討を加えていかなければならないであろう。

セカンドライフ前後の時間の増減

セカンドライフ前後における自由時間の増減をたずねたところ、約7割の人が増加とした。男女別にみると男性のほうが顕著であり、増加と答えた人が80.7ポイントに達する。一方女性で増加と答える人は57.3ポイントで、特に50代の女性では、逆に自由時間が減少とする人も2割近く存在する。(表23)

表23 セカンドライフ前後での自由時間の増減

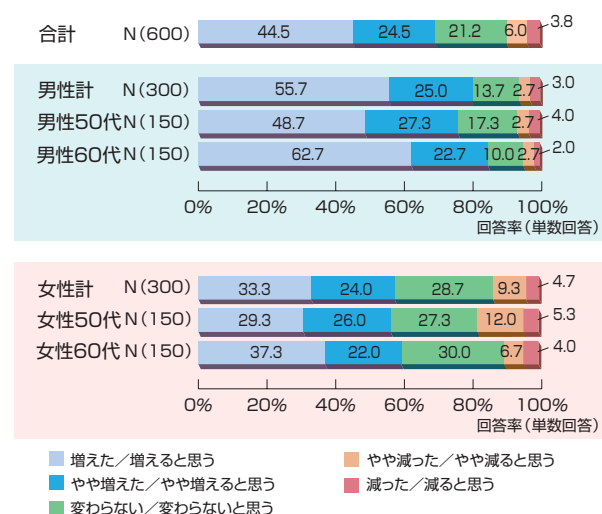
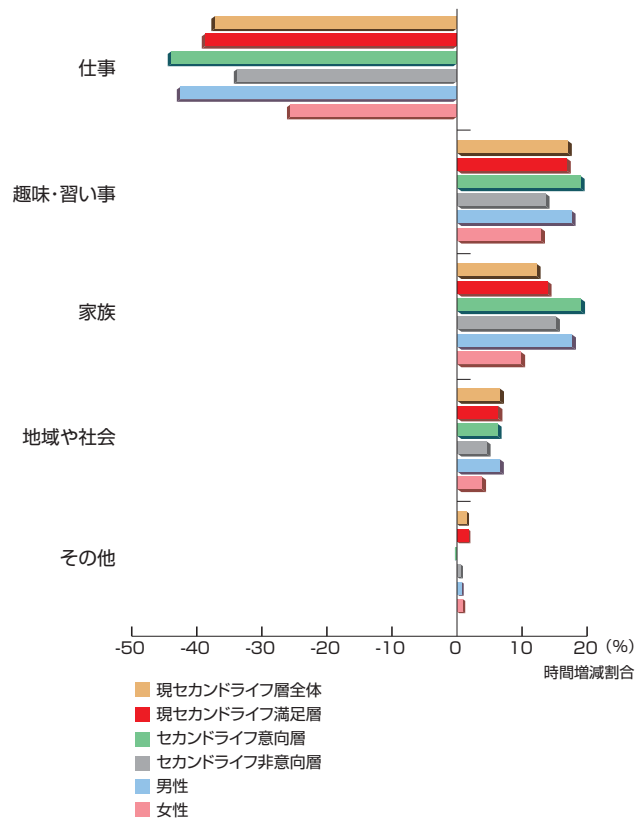


表24 セカンドライフ前後の時間配分の差



時間配分は仕事から、趣味や習い事、家族との時間へ

セカンドライフ前とセカンドライフに入ってから時間配分の差をみると、全体的に仕事の時間を減らして家族との時間や趣味、習い事の時間にシフトする傾向にある。特に早くセカンドライフに入りたいセカンドライフ意向層においてこの特徴が顕著に出ている。生涯現役における仕事は、精神的にゆとりをもって取り組める仕事を選び、自由な時間は自分の時間、家族との時間に費やすというスタイルが一般的になりそうだ。(表24)

1947年(昭和22年)から1949年(昭和24年)の間に生まれた、いわゆる団塊世代の退職がいよいよ2007年から始まる。突出した人口のこの世代の意識や価値観は他の世代とは大きく異なるといわれており、これまでもさまざまなブームや社会問題の担い手になってきた。そこで今回は団塊世代に焦点を当て、将来のセカンドライフ像に与えるインパクトを探ろうと試みた。

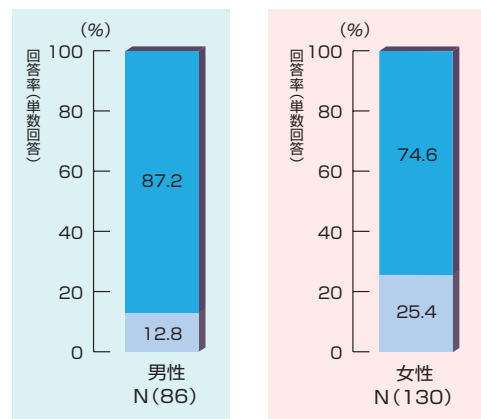
団塊世代にとってのセカンドライフとは「もう一度始まる新しい人生」

団塊世代で既にセカンドライフに入っていると答えた人は、男性12.8%、女性25.4%のみであった。(表25) そして、団塊世代にとってのセカンドライフとは「もう一度始まる新しい

人生」と答えた人が過半数という調査結果になった。そこで団塊世代にとってセカンドライフに入るのがいつの時点かをたずねた。(表26) それによると団塊世代の男性にとってのセカンドライフは、「定年で退職した時」と「仕事の第一線から退いた時」が最も高かった。また、それ以前の世代の男性と比べると「仕事の第一線から退いた時」と答える割合が高くなっており、一方「定年で退職した時」と答える割合は低くなっていった。団塊の男性からは、仕事の第一線からは退きセカンドライフに入った後も、更に新しい人生や可能性を追い求め続ける生涯現役志向が強く感じられる。

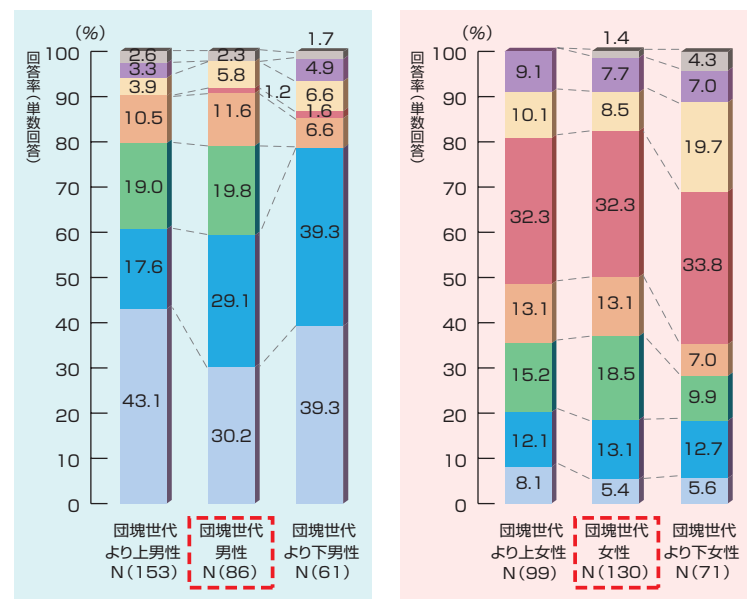
一方団塊世代の女性では、上の世代との差はあまりなく、「配偶者が退職した時」や「子供が仕事や結婚で独立した時」と答える割合が高い。家族のライフステージに応じた生活の節目が大きな影響を持っていることが伺える。

表25 セカンドライフに入っているか否かの意識<団塊世代>



■ セカンドライフに入っている
■ セカンドライフに入っていない

表26 各世代にとってのセカンドライフとは



■ その他
■ ある一定の年齢になった時
■ 年金をもらうようになった時
■ 完全に仕事をしなくなった時
■ 子供の第一線から退いた時
■ 定年で退職した時

男性にとって生涯現役とは「仕事を続けること」、女性にとっては「自立した生活」

次に団塊世代の男女に「生涯現役」の意味合いをたずねた。その結果多くの団塊世代の男性が考える「生涯現役」とは「(収入がある)仕事を続けること」という意識が突出していた。続いて「健康であること・体力を保ち続けること」や「好奇心を持ち続けること・チャレンジし続けること」。一方女性にとっては「自立した生活を送れること」が突出していた。また、「若々しい気持ちを持ち続けること」が男性と比較し高かった。(表27)

団塊世代の男性は、同じ仕事を続けたい

団塊世代の男性の約8割が60歳以降も働き続けたいと考えており、そのうち約半数が同じ会社の同じ職場で働き続けることを希望している。また、違う会社であってもスキルや経験を活かせるような同じ職業を希望する人が多い。(表28) 他の世代と比較しても、同じ環境で働き続けたいという傾向が高い

表27 団塊世代にとっての生涯現役とは

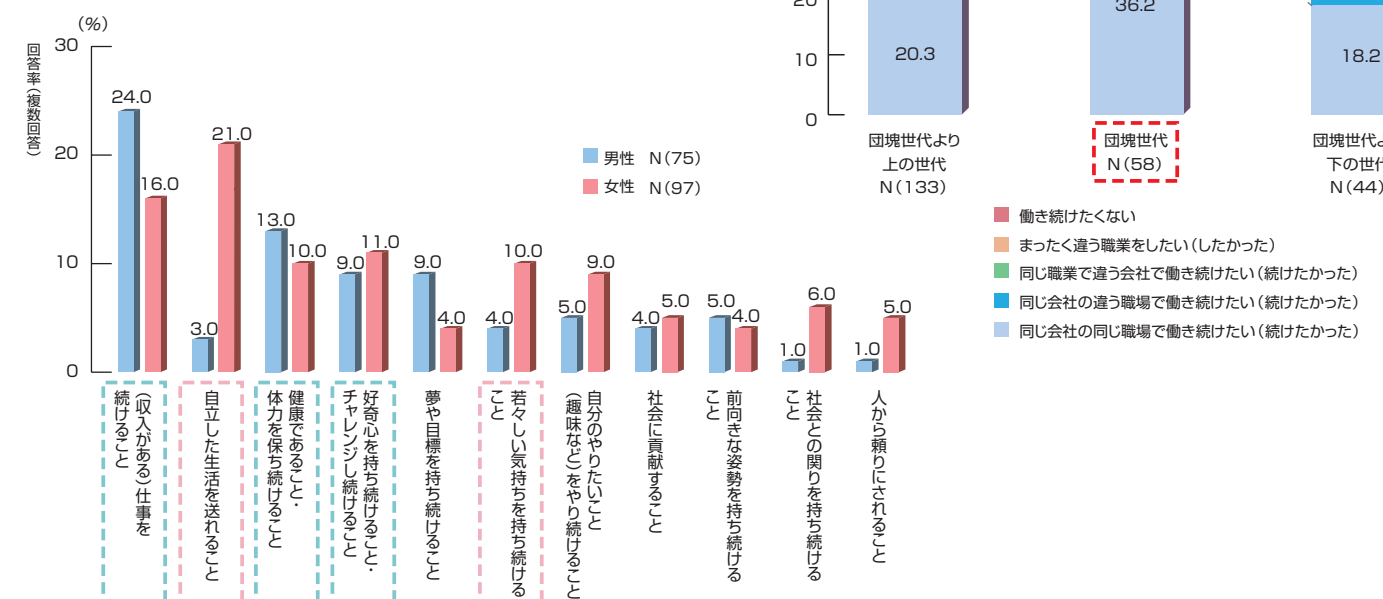
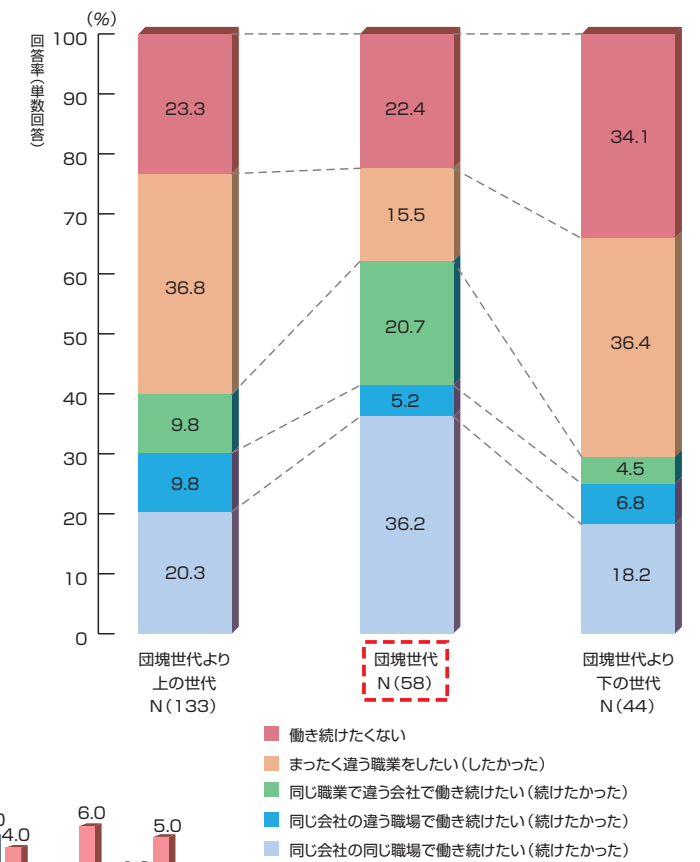


表28 60歳以降にどのように働きたいか



セカンドライフへの興味と準備

セカンドライフについて知りたいことは、お金を増やすことよりも、どのように使えるか、どのくらい節約したほうがいいのかという関心が強かった。続いて毎日を有意義に過ごすために何をすればよいかという「時間の使い方」への関心も高かった。また夫婦のうまい付き合い方についても2割強の人が関心を持っている。(表29)

セカンドライフへ向けての準備の度合い

団塊世代のうち、すでにセカンドライフに入っている人にセカンドライフを有意義に過ごすための準備をしていたかをたずねたところ、セカンドライフに満足している人たちは、セカンドライフに入る前から準備をしていたことがわかった。(表30) また、まだセカンドライフに入っていない団塊世代に準備をし

ているかをたずねたところ、すでに準備を進めている人は男女ともに3割程度であった。その内容は「マネープランを立てる」「趣味・生涯学習などのクラブ・講座に参加する」などに続き「夫(妻)との関係を良くする」などがあげられている。(表31)

表30 セカンドライフ満足度と準備の関係

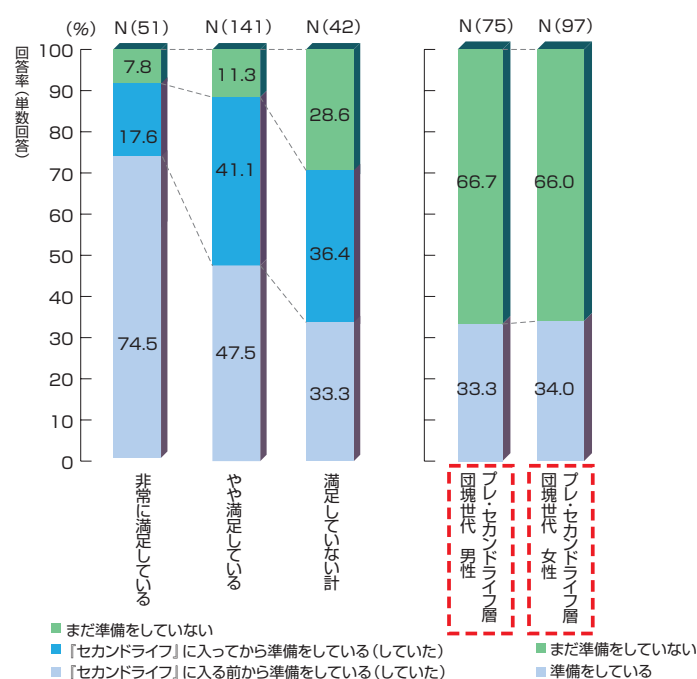


表31 セカンドライフを有意義に過ごすために準備していること

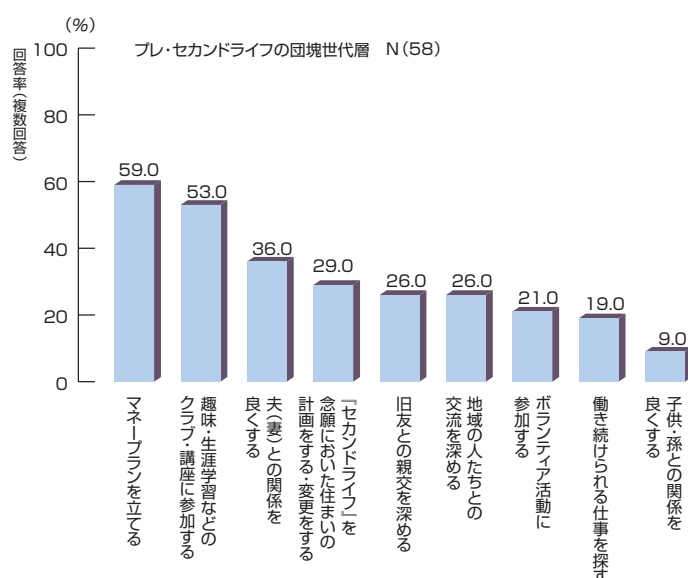
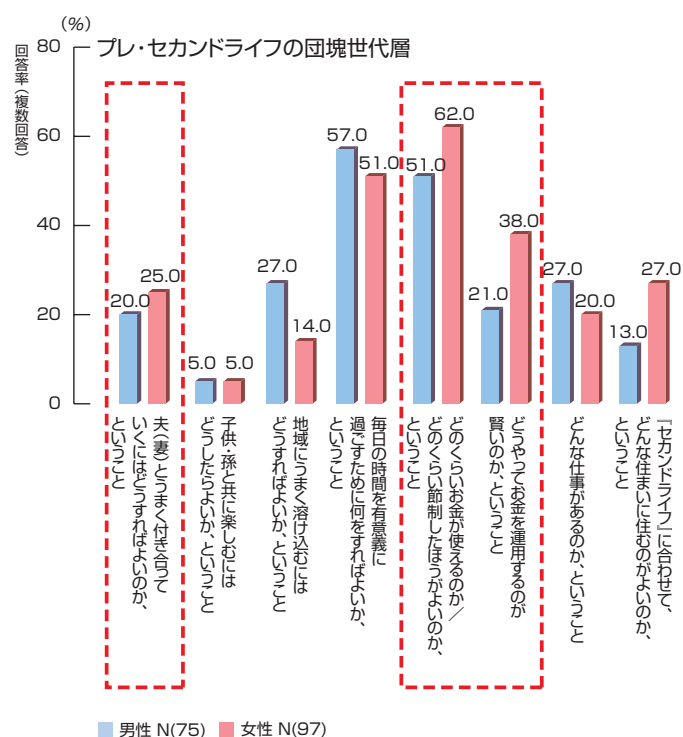


表29 セカンドライフについて知りたいこと



定義

1. 現セカンドライフ層 = 「自分はすでにセカンドライフに入っている。」と回答した層。

2. プレ・セカンドライフ層 = 「自分はこれからセカンドライフに入る。」と回答した層。

$$3. \text{セカンドライフ満足度指数} = \frac{\left(\begin{array}{l} \text{現セカンドライフ層の} \\ \text{「満足」+「まあ満足」計} \end{array} \right) + \left(\begin{array}{l} \text{プレ・セカンドライフ層の「今すぐ入り} \\ \text{たい」+「できるだけ早く入りたい」計} \end{array} \right)}{2}$$

4. 満足層 = 現セカンドライフ層のうち生活満足度に対する質問の答えが「満足」、「まあ満足」である人の合計

5. 非満足層 = 現セカンドライフ層のうち、生活満足度に対する質問の答えが「満足していない」、「あまり満足していない」である人の合計

6. セカンドライフ意向層<意向度> = 早くセカンドライフに入りたい層 <入りたい割合>

プレ・セカンドライフ層のうち、セカンドライフに入りたいかどうかという質問の答えが「今すぐ入りたい」、「できるだけ早く入りたい」である人の合計

7. セカンドライフ非意向層<非意向度> = セカンドライフに入りたくない層 <入りたくない割合>

プレ・セカンドライフ層のうち、セカンドライフに入りたくないかどうかという質問の答えが「セカンドライフをできるだけ先延ばしにしたい」、「セカンドライフに入りたくない」である人の合計

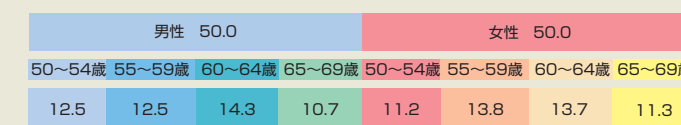
調査フレーム1

セカンドライフ満足度指数調査 2006

調査実施機関 ハートフォード生命保険株式会社
調査対象者 50歳～69歳の男女個人
調査方法 訪問留め置き調査
調査地域 全国6都市(札幌、仙台、東京、名古屋、大阪、福岡)
実査時期 2006年7月20日(木)～8月9日(水)
有効回答数 600サンプル

●回答者プロフィール

男女別年齢構成比



調査フレーム2

団塊世代調査
調査実施機関 ハートフォード生命保険株式会社
調査対象者 50歳～69歳の男女個人
実施方法 Webアンケート調査
調査地域 全国
実施時期 2006年10月13日(金)～10月16日(月)
有効回答数 600サンプル

●回答者プロフィール

男女別年齢構成比

